

I 男女の地位の平等

1 男女平等についての現在の状況（問1 20ページ）

男女の地位が「平等である」分野は、男女とも「学校教育の場」と考える人が最も多い

全体では「平等である」が、“(d) 学校教育の場では” (45.8%)、“(a) 家庭の中では” (32.7%)、“(c) 地域活動の中では” (29.4%)、“(f) 法律や制度の上では” (27.8%) の順に多くなっている。「平等である」が最も少ないのは“(e) 政治の場では” (9.3%) である。

女性では、“(g) 社会全体では” (7.5%)、“(e) 政治の場では” (5.3%) で、「平等である」が1割未満になっており、また、すべての項目で男性よりも「平等である」が少なくなっている。

男性では、“(g) 社会全体では” (16.8%)、“(e) 政治の場では” (14.3%) では1割台となっているが、すべての項目で女性よりも、「平等である」が多くなっている。特に差が大きいのは“(f) 法律や制度の上では” (38.9%) で、男性が女性を19.4ポイント上回っている。

II 家庭生活等

1 家庭における役割（問2 40ページ）

家庭の中で「妻の役割」である仕事は、男女とも「食事の支度」と考える人が最多

家庭の仕事は誰の役割だと思うかについて、『妻の役割』と回答した割合が多いのは、“(b) 食事の支度は” (女性72.3%、男性75.1%)、次いで“(d) 洗濯は” (女性67.6%、男性66.8%)、“(g) 日常の買い物は” (女性66.0%、男性54.4%) の順となった。

「夫婦同じ程度の役割」の割合が高いのは、“(h) 高額商品の購入の決定は” (女性47.2%、男性47.8%)、“(j) 育児・しつけは” (女性42.8%、男性42.1%)、“(k) PTAや地域活動への参加は” (女性38.9%、男性38.0%) の順となっている。

2 「男は仕事、女は家庭」という考え方（問3 66ページ）

全体では、反対派が上回る。女性では男性よりも反対派が上回る

全体では、「賛成」(3.0%)、「やや賛成」(15.5%) を合わせて『賛成である(計)』は18.5%となっている。一方、「あまり賛成しない」(26.8%)、「賛成しない」(19.4%) を合わせた『賛成しない(計)』は46.2%となり『賛成しない(計)』が『賛成である(計)』を27.7ポイント上回っている。「どちらともいえない」は33.5%となっている。

女性では、『賛成である(計)』は15.2%、『賛成しない(計)』は50.5%となり、『賛成しない(計)』が『賛成である(計)』を35.3ポイント上回った。

男性では、『賛成である(計)』は23.2%、『賛成しない(計)』は40.6%となり、『賛成しない(計)』が『賛成である(計)』を17.4ポイント上回っている。

3 「男は仕事、女は家庭」という考え方に賛成する理由（問3-1 72ページ）

「自分の両親も役割分担をしていたから」で男女に差

多くの項目で目立った差は見られないが、「自分の両親も役割分担をしていたから」では女性(12.3%)より男性(23.9%)の方が11.6ポイント多くなっている。

女性では、「家事・育児・介護と両立しながら、女性(妻)が働き続けることは大変だから」が30代(66.7%)と40代(68.4%)で6割を超え、他の年代より多くなっている一方で、男性では、18~29歳(68.4%)が唯一6割を超え、他の年代より多くなっている。

4 「男は仕事、女は家庭」という考え方に反対する理由（問3-2 73ページ）

「固定的な男性（夫）と女性（妻）の役割分担の意識を押しつけるべきではないから」が最多

「固定的な男性（夫）と女性（妻）の役割分担の意識を押しつけるべきではないから」が女性（69.9%）、男性（59.6%）ともに最も多く、女性の方が10.3ポイント多くなっている。また、男女の差が最も大きいのは、「女性（妻）が働いて能力を發揮した方が、個人や社会にとって良いから」で、男性の方が12.0ポイント多くなっている。

5 男性が家事・育児を行うことのイメージ（問4 74ページ）

男女の差が大きいものとして、「子どもにいい影響を与える」は女性が21.5ポイント上回る

全体では、「男性も家事・育児を行うことは、当然である」（58.5%）が最も多く、次いで「子どもにいい影響を与える」（55.2%）が続いている。他は半数を下回っている。

女性では「子どもにいい影響を与える」が最も多く（女性64.7%、男性43.2%）、男性では「男性も家事・育児を行うことは、当然である」（女性62.4%、男性53.9%）が最も多くなっている。

男女の差が大きいものとしては、「子どもにいい影響を与える」（21.5ポイント差）が女性のポイントが高い一方で、「家事・育児は、男性よりも女性の方が向いている」（18.0ポイント差）は男性のポイントが高くなっている。

6 男性が仕事以外の生活を重視した働き方を選択することについて（問5 79ページ）

女性は「育児・介護休暇の取得」、男性は「リフレッシュ休暇の取得」が最多

全体では、「リフレッシュのための休暇を取得する」（58.3%）が最も多く、次いで「育児・介護のための休暇を取得する」（56.5%）、「育児・介護のための短時間勤務制度を活用する」（42.3%）、「仕事と育児・介護を両立するため、仕事の負担を軽減してもらう」（31.8%）が続いている。

女性では「育児・介護のための休暇を取得する」が最も多く（女性62.8%、男性48.7%）、男性では「リフレッシュのための休暇を取得する」（女性58.4%、男性58.4%）が最も多くなっている。

男女の差が大きいものとしては、「育児・介護のための短時間勤務制度を活用する」（16.7ポイント差）、「育児・介護のための休暇を取得する」（14.1ポイント差）で、女性のポイントが高くなっている。

7 男性が家事、子育て、介護、地域活動に参加するため必要なこと（問6 83ページ）

全体では、「夫婦や家族間で家事・育児などの分担について、十分に話し合うこと」が最多

全体では、「夫婦や家族間で家事・育児などの分担について、十分に話し合うこと」（59.1%）が最も多く、次いで「育児・介護のための休暇を取得しやすい職場環境が整備されること」（58.2%）、「男性が家事・育児などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」（56.8%）が続いている。

男女の差は「年配者やまわりの人が、夫婦の役割分担などについての当事者の考え方を尊重すること」が最も大きく、女性の方が19.9ポイント多くなっている。

また、女性では、「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」で、共働きである人（67.3%）が最も多く、「夫婦や家族間で家事・育児などの分担について、十分に話し合うこと」で、共働きでない人（65.8%）が最も多くなっている。

男性では、共働きの有無を問わず「育児・介護のための休暇を取得しやすい職場環境が整備されること」が最も多くなっている。

8 子どもの教育方針（問7 87ページ）

女の子には「思いやり」と「気配り」、男の子には「思いやり」と「責任感」を望む

“(a)女の子の場合”は、男女ともに「思いやりがある子」が最も多く、7割を超えている。次いで「気配りができる子」が5割以上となっており、続いて「誰にでも好かれる子」となっている。

“(b)男の子の場合”は、男女とも“(a)女の子の場合”と同様に「思いやりがある子」が最も多いが、続いて「責任感の強い子」、「活発で行動力がある子」が多くなっている。

9 親の介護における役割分担

「(a)自分の親の介護」（問8(a) 92ページ）

女性は「自分の方が配偶者より多く分担」、男性は「配偶者と半分ずつ分担」が最多

全体では、「外部サービスを利用しながら、自分の方が配偶者より多く分担」（50.3%）が最も多くなっている。

「外部サービスを利用しながら、自分の方が配偶者より多く分担」（女性65.2%、男性31.3%）が女性で最も多く、「外部サービスを利用しながら、自分と配偶者で半分ずつ分担」（女性19.5%、男性42.3%）が男性で最も多い。

「(b)配偶者の親の介護」（問8(a) 96ページ）

女性は「配偶者と半分ずつ分担」、男性は「配偶者の方が自分より多く分担」が最多

全体では、「外部サービスを利用しながら、自分と配偶者で半分ずつ分担」（42.0%）が最も多くなっている。

「外部サービスを利用しながら、自分と配偶者で半分ずつ分担」（女性47.1%、男性35.4%）が女性で最も多く、「外部サービスを利用しながら、配偶者の方が自分より多く分担」（女性25.3%、男性38.5%）が男性で最も多い。

10 介護するときに困ること（問9 100ページ）

男女とも「自分の精神的・肉体的な負担が大きいこと」が最多

全体では「自分の精神的・肉体的な負担が大きいこと」（76.4%）が最も多い。また、男女とも「自分の精神的・肉体的な負担が大きいこと」（女性83.7%、男性66.8%）が最も多く、次いで「介護に要する経済的な負担が大きいこと」（女性57.1%、男性56.3%）が続く。

男女の差が大きいものとしては「自分の育児や家事への影響が生じること」（18.4ポイント差）、「自分の精神的・肉体的な負担が大きいこと」（16.9ポイント差）で女性のポイントが高くなっている。

また、「適切な介護の仕方がわからないなど、必要な知識がないこと」（9.0ポイント差）については、男性のポイントが女性を上回っている。

Ⅲ 職業

1 職場での男女平等について（問10 104ページ）

男女ともに「平等である」は「教育や研修制度」で最も多く、「昇進・昇格」で最も少ない

男女ともに「平等である」と回答した人が最も多いのは、“(d) 教育や研修制度は”（女性53.6%、男性61.8%）となっている。

一方、最も少ないのは、“(b) 昇進・昇格は”（女性31.4%、男性31.9%）で、次いで“(c) 人事配置は”（女性32.6%、男性36.6%）となっている。

『男性が優遇されている』については、男女とも“(b) 昇進・昇格は”（女性36.2%、男性42.6%）が最も多い。

『女性が優遇されている』については、男性は“(f) 仕事の内容は”（15.6%）が最も多く、女性では“(a) 募集や採用の条件では”（8.9%）が、最も多い。

2 女性が管理職に昇進することについて（問11 108ページ）

男女ともに賛成派が半数を超え、女性では8割

男女とも『賛成である（計）』（女性80.4%、男性69.7%）が『賛成しない（計）』（女性2.2%、男性6.7%）を上回っている。

『賛成である（計）』は女性の方が男性より10.7ポイント多く、『賛成しない（計）』は男性の方が女性より4.5ポイント多くなっている。

3 管理職に昇進することのイメージ

「(a) 女性が昇進することについての一般的なイメージ」（問12(a) 111ページ）

男女とも「能力が認められた結果である」が最多

男女ともに「能力が認められた結果である」（女性74.1%、男性66.7%）、「責任が重くなる」（女性65.0%、男性53.1%）、「賃金が上がる」（女性52.2%、男性37.1%）の順となっている。

男女の差が大きいものとして、「やりがいのある仕事ができる」（17.3ポイント差）で女性が男性のポイントを大きく上回っている。

「(b) あなた自身が昇進することについてのイメージ」（問12(b) 111ページ）

「仕事と家庭の両立が困難になる」は女性が男性を25.6ポイント上回る

男女ともに「責任が重くなる」（女性74.9%、男性70.5%）、「能力が認められた結果である」（女性58.3%、男性57.6%）、「賃金が上がる」（女性54.0%、男性52.5%）の順となっている。

男女の差が大きいものとしては、「仕事と家庭の両立が困難になる」（25.6ポイント差）で女性のポイントが、「自分自身で決められる事柄が多くなる」（10.1ポイント差）で男性のポイントが高くなっている。

4 女性のリーダーを増やす上での障害（問13 115ページ）

女性では「家事・育児などの相互協力」が、男性では「長時間労働の改善」が最多

女性では「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（女性58.3%、男性37.7%）が最も多く、男性では「長時間労働の改善が十分ではないこと」（女性42.1%、男性42.4%）が最も多くなっている。

男女差では、「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（20.6ポイント差）で女性が男性のポイントを大きく上回っており、「現時点では、必要な知識や経験などを持つ女性が少ないこと」（8.8ポイント差）で男性のポイントが女性のポイントを上回っている。

5 女性が働き続ける上での障害（問14 118ページ）

男女とも「家事・育児などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」が最多

男女とも、「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（女性70.7%、男性57.7%）が過半数で最も高く、次いで「結婚や出産の際退職しなければならない慣行が今でも残っていること」（女性36.5%、男性41.8%）の順となっている。

男女の差が大きいものとして、「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力が十分ではないこと」（13.0ポイント差）で女性が男性のポイントを大きく上回っており、「女性の能力が正当に評価されないこと」（6.7ポイント差）で男性のポイントが高くなっている。

6 女性の再就職に必要なこと（問15 120ページ）

男女とも「家事・育児などにおける家庭内の相互の協力」が最多

男女ともに「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力」（女性70.4%、男性62.7%）が最も多くなっている。「保育・介護サービスの充実（施設の充実、時間の延長など）」（女性63.6%、男性61.7%）が続いている。

「家事・育児・介護などにおける家庭内の相互の協力」は、女性の方が7.7ポイント多く、「退職者の再雇用制度の普及」（女性35.9%、男性45.4%）は、男性の方が9.5ポイント多くなっている。

7 男女が共に仕事と家庭を両立していくために必要なこと（問16 123ページ）

男女とも「育児・介護休業制度を利用しやすい職場環境づくり」が最多

男女とも、「育児休業・介護休業制度を利用しやすい職場環境づくり」（女性62.9%、男性58.5%）が最も高くなっている。次いで「労働時間の短縮や休暇制度の充実」（女性45.3%、男性49.6%）、「保育・介護サービスの充実」（女性36.5%、男性33.3%）となっている。

男女の比較では、女性は「女性が働くことについての家族や周囲の理解と協力」（女性25.3%、男性19.2%）などの周囲の協力や理解を求める項目で、男性は、「在宅勤務やフレックスタイム制度の導入」（女性23.3%、男性29.9%）などの制度の導入や充実などの項目で上回っている。

IV 女性の社会参画

1 女性のリーダーが増えるとどのような影響があると思うか（問17 126ページ）

男女とも「男女問わず優秀な人材が活躍できるようになる」が最多

全体では、男女ともに、「男女問わず優秀な人材が活躍できるようになる」（女性71.2%、男性68.7%）が最も多く、次いで、「多様な視点加わることにより、新たな価値や商品・サービスが創造される」（女性60.0%、男性59.8%）、「女性が持つ意見や発想が反映される」（女性59.6%、男性57.5%）の順となった。

男女の差が大きいものとして、「男女問わず仕事と家庭の両方を優先しやすい社会になる」では女性（42.9%）が男性（31.1%）を11.8ポイント上回っている。

2 女性が方針決定の場に参画するために必要なこと（問18 129ページ）

女性では「時間帯の工夫」、男性では「役割分担意識を改めること」が最多

女性では、「さまざまな立場の人が参加しやすいよう活動時間帯を工夫すること」（55.5%）が最も多く、次いで「地域活動のリーダーは男性が務めるという性別による役割分担意識を改めること」（35.7%）となっている。

男性では「地域活動のリーダーは男性が務めるという性別による役割分担意識を改めること」（51.8%）が最も多く、次いで「さまざまな立場の人が参加しやすいよう活動時間帯を工夫すること」（45.3%）となっている。

V ドメスティック・バイオレンス（DV）等

1 配偶者や交際相手などからの暴力と認識される行為（問19 133ページ）

「刃物などを突きつけて、おどす」「なぐったり、けったり、物を投げつけたりする」等で9割

「暴力にあたる」と思うと答えた人を多い順に見ていくと、“(b) 刃物などを突きつけて、おどす”（女性94.8%、男性94.8%、全体94.7%）が最も多く、次いで“(c) なぐったり、けったり、物を投げつけたりする”（女性93.6%、男性95.3%、全体94.2%）、“(a) 骨折や打ち身、切り傷などのケガをさせる”（女性93.3%、男性94.3%、全体93.6%）が9割以上となっており、続いて“(n) 嫌がっているのに、性的な行為を強要する”（女性88.4%、男性86.5%、全体87.5%）、“(d) 壁にものを投げたり、なぐるふりをしておどす”（女性78.5%、男性75.8%、全体77.3%）、“(m) 家計に必要な生活費を渡さない”（女性80.7%、男性73.2%、全体77.3%）、“(l) 「誰のおかげで生活できるんだ」や「甲斐性なし」などと言う”（女性78.9%、男性73.9%、全体76.7%）、“(j) 職場に行くことを妨害したり、外出先を制限する”（女性78.4%、男性72.7%、全体75.7%）、“(o) 避妊に協力しない”（女性76.3%、男性70.6%、全体73.7%）の順となった。

“(g) 他の異性や親しい人との会話を許さない”、“(e) 大声でどなる”、“(f) 馬鹿にしたり、見下したような言動をする”は、「暴力にあたる」と思う人の割合は少なくなっている。

男女を比較すると、大半の項目で、女性の方が「暴力にあたる」と思う人の割合が多い。

2 配偶者からのこれまでの被害経験の有無（問20 156ページ）

男女とも「身体的暴行」で最も比率が高い

“(a) 身体的暴行”では、「何度もあった」（女性4.7%、男性3.1%）、「1、2度あった」（女性18.9%、男性12.3%）となり、その合計では女性が男性を8.2ポイント上回っている。

“(b) 心理的攻撃”では、「何度もあった」は女性（9.0%）が男性（4.0%）を5.0ポイント上回り、「1、2度あった」（女性12.5%、男性13.4%）では、大きな差は見られない。

“(c) 経済的圧迫”では、「何度もあった」（女性5.7%、男性1.5%）、「1、2度あった」（女性5.2%、男性3.5%）となり、その合計では女性が男性を5.9ポイント上回った。

“(d) 性的強要”では、「何度もあった」（女性4.6%、男性0.9%）、「1、2度あった」（女性9.6%、男性2.0%）で、その合計では女性が男性を11.3ポイント上回った。

3 配偶者からのこの1年間の被害経験の有無（問20 163ページ）

男女とも「心理的攻撃」で最も比率が高い

“(a) 身体的暴行”では、「何度もあった」（女性2.1%、男性2.9%）、「1、2度あった」（女性17.2%、男性11.4%）となり、その合計では女性が男性を5.0ポイント上回っている。

“(b) 心理的攻撃”は、総数・男女ともに最も多く、「何度もあった」（女性12.1%、男性7.6%）、「1、2度あった」（女性31.1%、男性25.3%）となり、その合計では女性が男性を10.3ポイント上回っている。

“(c) 経済的圧迫”では、「何度もあった」（女性10.4%、男性17.4%）、「1、2度あった」（女性13.4%、男性8.7%）となり、その合計では男性が女性を2.3ポイント上回った。

“(d) 性的強要”では、「何度もあった」（女性5.7%、男性7.7%）、「1、2度あった」（女性8.0%、男性7.7%）で、その合計では男性が女性を1.7ポイント上回った。

4 配偶者からの暴力についての相談経験の有無（問20-1 170ページ）

「どこ（だれ）にも相談しなかった」は、女性41.8%、男性58.0%

配偶者から被害を受けたことが「これまでにあった」と答えた人に、どこ（だれ）かに打ち明けたり、相談したことがあるかをたずねたところ、「相談した」と答えた人は37.5%、「相談しなかった」は47.1%で、「相談しなかった」の方が9.6ポイント多かった。

相談した人のうち、どこ（だれ）に相談したかを見ると、女性では「家族や親戚」（25.9%）、次いで「知人、友人」（24.5%）の順で、その他は3%未満となっている。

男性では「家族や親戚」（9.8%）、次いで「知人、友人」（8.9%）の順で、その他は2%未満となっている。

男女を比較すると、男性の方が「どこ（だれ）にも相談しなかった」（58.0%）が5割を超え、女性（41.8%）より16.2ポイント多くなっている。

5 配偶者からの暴力について相談しなかった理由（問20-2 175ページ）

男女ともに「相談するほどのことではないと思ったから」が最多

配偶者から被害を受けながら「相談しなかった」と答えた人に、その理由をたずねたところ、男女ともに最も多かったのが「相談するほどのことではないと思ったから」（女性54.3%、男性52.3%）であった。

次いで、女性では「相談してもむだだと思ったから」（34.8%）、「自分にも悪いところがあると思ったから」（32.6%）、「自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」（29.3%）と続く。

男性では「自分にも悪いところがあると思ったから」（36.9%）、「相談してもむだだと思ったから」（24.6%）と続く。

男女の違いで特徴的なのは、「相談してもむだだと思ったから」では女性の方が10.2ポイント多くなっている。「どこ（だれ）に相談してよいのかわからなかったから」では男性の方が12.7ポイント多くなっている。

6 交際相手からの被害経験の有無（問21 178ページ）

男女とも「心理的攻撃」で最も比率が高い

“(a) 身体的暴行”では、『10～20歳代にあった』（女性8.4%、男性3.4%）、「30歳代以上にあった」（女性1.7%、男性1.1%）となり、その合計では女性が男性を5.6ポイント上回っている。

“(b) 心理的攻撃”では、『10～20歳代にあった』（女性10.0%、男性4.8%）、「30歳代以上にあった」（女性2.8%、男性1.4%）で、その合計では女性が男性を6.6ポイント上回っている。

“(c) 経済的圧迫”では、『10～20歳代にあった』（女性5.0%、男性1.7%）、「30歳代以上にあった」（女性1.5%、男性1.1%）となり、その合計では女性が男性を3.7ポイント上回った。

“(d) 性的強要”では、『10～20歳代にあった』（女性6.7%、男性1.4%）、「30歳代以上にあった」（女性1.5%、男性0.3%）で、その合計では女性が男性を6.5ポイント上回った。

全ての項目で、『10～20歳代にあった』と「30歳代以上にあった」のいずれにおいても、女性の方が男性より多くなっている。

7 同居の際の交際相手からの被害経験の有無 (問21 187ページ)

女性では「身体的暴行」で、男性では「心理的攻撃」で最も比率が高い

“(a) 身体的暴行”では、『10～20歳代にあった』(女性20.7%、男性6.5%)、「30歳代以上にあった」(女性6.9%、男性4.3%)となり、その合計では女性が男性を16.8ポイント上回っている。

“(b) 心理的攻撃”では、『10～20歳代にあった』は(女性17.2%、男性14.6%)、「30歳代以上にあった」(女性5.2%、男性6.3%)で、合計では女性が男性を1.5ポイント上回っている。

“(c) 経済的圧迫”では、『10～20歳代にあった』(女性12.3%、男性6.4%)、「30歳代以上にあった」(女性3.5%、男性6.4%)となり、合計では女性が男性を3.0ポイント上回っている。

“(d) 性的強要”では、『10～20歳代にあった』(女性10.5%、男性4.3%)、「30歳代以上にあった」(女性1.8%、男性4.3%)となり、合計では女性が男性を3.7ポイント上回っている。

8 交際相手からの暴力についての相談経験の有無 (問21-1 195ページ)

「どこ(だれ)にも相談しなかった」は、女性36.6%、男性57.6%

「どこ(だれ)に相談しなかった」人は43.3%(女性36.6%、男性57.6%)で男性が上回っている。

相談先では、男女とも「知人、友人」(女性49.3%、男性27.3%)が最も多く、次いで「家族や親戚」(女性21.1%、男性15.2%)と続く。

他の項目は1割を下回っている。

9 交際相手からの暴力について相談しなかった理由 (問21-2 197ページ)

女性は「相談するほどのことではない」、男性は「自分にも悪いところがある」が最多

交際相手から被害を受けながら「相談しなかった」と答えた人に、その理由をたずねたところ、女性で最も多かったのは「相談するほどのことではないと思ったから」(38.5%)であった。男性で最も多かったのは「自分にも悪いところがあると思ったから」(42.1%)であった。

女性では、次いで「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」(30.8%)、「相談してもむだだと思ったから」(26.9%)が続く。

男性では、次いで「相談するほどのことではないと思ったから」(36.8%)、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」「別れるつもりがなかったから」がともに21.1%で並んだ。

女性の方が男性より多くなったのは、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」、「相談してもむだだと思ったから」、「自分さえ我慢すれば、なんとかこのままやっていけると思ったから」、「どこ(だれ)に相談してよいのかわからなかったから」、「他人を巻き込みたくなかったから」、「自分が受けている行為がDVとは認識していなかったから」などがある。

男性の方が女性より多くなったのは、「別れるつもりがなかったから」「自分にも悪いところがあると思ったから」などであった。

10 性暴力被害に関するイメージ（問22 200ページ）

男女ともに「被害にあうのはたいてい暗い夜道やひと気のない場所である」が最多

男女とも「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が最も多かったのは「(c) 被害にあうのはたいてい暗い夜道やひと気のない場所である」(女性42.1%、男性44.8%)であった。次いで、「(a)性暴力にあうのは、若い女性である」(女性37.2%、男性44.6%)、「(b)挑発的な服装や行動が被害をまねている」(女性27.8%、男性37.6%)となっている。

男女とも「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の合計が最も多かったのは「(d)本気で抵抗すれば被害は防げる」(女性55.1%、男性52.7%)であった。

男女の「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の差が大きいものとしては「(b)挑発的な服装や行動が被害をまねている」(9.8ポイント差)と「(g)性暴力は、加害者の性欲が強すぎて、コントロールできずに起こっている」(9.7ポイント差)であり、ともに男性が上回っている。

11 相談機関・関係者の周知状況（問23 209ページ）

男女とも最も多かったのは「警察」

男女とも最も多かったのは「警察」(女性81.2%、男性84.3%)であった。

次いで、男女ともに「石川県女性相談支援センター（配偶者暴力相談支援センター）」(女性24.8%、男性18.8%)、「市役所、町役場に設置されている女性相談支援室など」(女性19.5%、男性17.4%)、「石川県女性センター」(女性16.4%、男性16.6%)の順となっている。

12 DVや性暴力等の暴力をなくすために必要なこと（問24 213ページ）

男女とも、「被害者が早期に相談できるよう、相談窓口や保護施設を充実させる」が最多

全体では、「被害者が早期に相談できるよう、相談窓口や保護施設を充実させる」(女性71.1%、男性66.0%、全体68.7%)が最も多く、次いで「加害者への罰則を強化する」(女性58.9%、男性58.0%、全体58.6%)、「学校または大学で、児童・生徒・学生に対し、暴力の被害者にも加害者にもならないよう教育を行う」(女性57.1%、男性49.4%、全体53.6%)の順となった。

男女の差が大きいものとしては、「家庭で保護者が子どもに対し、暴力の被害者にも加害者にもならないよう教育を行う」(8.6ポイント差)と「学校または大学で、児童・生徒・学生に対し、暴力の被害者にも加害者にもならないよう教育を行う」(7.7ポイント差)で女性のポイントが多くなっている。

VI 男女共同参画社会の実現に向けて

1 用語の周知度（問25 218ページ）

男女とも「DV」で9割超、「男女雇用機会均等法」「マタニティ・ハラスメント」で8割を超える

全体では、“(k)DV（配偶者や交際相手からの暴力）”が最も周知度が高く（女性92.9%、男性92.4%、全体92.3%）、次いで“（h）男女雇用機会均等法”（女性86.5%、男性87.8%、全体86.7%）、“（m）マタニティ・ハラスメント”（女性88.2%、男性83.6%、全体86.1%）となっており、8割を超えている。続いて、“（a）男女共同参画社会”（女性69.0%、男性72.7%、全体70.4%）、“（n）性的少数者（LGBTなど）”（女性68.1%、男性69.8%、全体68.7%）、“（f）ジェンダー（社会的・文化的につくられた性別）”（女性65.7%、男性60.2%、全体63.1%）、“（j）仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）”（女性60.9%、男性61.5%、全体61.0%）で6割を超えている。

2 男女共同参画社会の実現のために行政に対して望むこと（問26 250ページ）

全体で「保育の施設・サービスや、高齢者や病人の施設や介護サービスを充実する」が最多

全体では「保育の施設・サービスや、高齢者や病人の施設や介護サービスを充実する」（44.7%）が最も多く、次いで「条例や制度の面で見直しを行い、性別による差別につながるものを改める」（39.5%）が続いている。

女性で最も多かったのは「保育の施設・サービスや、高齢者や病人の施設や介護サービスを充実する」（48.0%）、次いで「条例や制度の面で見直しを行い、性別による差別につながるものを改める」（38.5%）となっている。

男性では「条例や制度の面で見直しを行い、性別による差別につながるものを改める」（41.1%）が最も多く、次いで「保育の施設・サービスや、高齢者や病人の施設や介護サービスを充実する」（40.8%）となっている。

男女の差があるものについては、「保育の施設・サービスや、高齢者や病人の施設や介護サービスを充実する」は女性が7.2ポイント、「政策や方針決定の場に女性を積極的に登用する」は男性が7.2ポイント多くなっている。